

発展途上国から見た地球環境問題

沈みゆく島々 ― 地球温暖化の中のオセアニア

塩田光喜

Che strazio, oime, che smania!

Che inferni che terrori!

何という責め苦、ああもう、何という狂おしさ―

何という地獄！何という恐怖！

ダ・ポンテ・モーツァルト『ドン・ジョヴァ

ンニ』（小瀬村幸子訳、音楽之友社、

二〇〇三年）。

●ミレニアム開発計画から気候変動との戦いへ

世界の開発の指令塔である国連開発計画（UNDP）は二〇〇七年一月二七日、二〇〇七年版『人間開発報告書』を発表した。それを手にした読者は驚愕せずにはいられなかつたろう。

そのタイトルは「気候変動との戦い―分断された世界で試される人類の団結」である。

その異色の報告書には冒頭に、これも、これまでの『人間開発報告書』とは全く異なったトーンで、マーティン・ルーサー・キング牧師の言葉が掲げられている。

「いま私たちの目の前には、きわめて緊

急性を要する問題があります。（略）対策が遅れば取り返しがつかないことになりかねません。（略）野ざらしになった白骨の山と数知れない文明の瓦礫の上に、痛ましい言葉が記されています。『手遅れ』という言葉が」

きわめて鋭い警告の言葉である。一体、報告書の著者は何を我々に訴えようとしているのであろうか。

「二一世紀初めに生きる私たちも同様に、『きわめて緊急性』を要し、現在のみならず未来をも左右する危機に直面している」と報告書の著者は我々に告げる。「その危機とは、気候変動である。」

それはどれほど緊急性を要する問題なのか。

「危機を回避するために世界に与えられた時間は、一〇年もない。」

著者は続けて、「気候変動は、人間の自由を蝕み、選択肢を狭めてしまえばかりか、人類の進歩を通じて未来が過去より明るいものになるという啓蒙主義的前提を揺るがせてしまう」と言う。

さらに、「いま私たちは、遠くない将来

に人間開発のプロセスが大きく後退するかも知れないという兆候を目のあたりにしている」とたたみかける。

一体、UNDPに何が起こったのだろう。UNDPは二一世紀に入る直前、二〇〇〇年の、国連サミットでミレニアム開発目標（MDGs）を掲げたばかりではないのか。

ミレニアム。この言葉は英語で「千年紀」を意味する語である（我々は二〇〇一年から、キリスト紀元の第三千年紀に入っている）と同時にキリスト教においては「千年王国」、「至福千年」を意味するものである。「千年王国」。このキリスト教徒に非ざる者には耳慣れない異様な概念は、『旧新約聖書』の掉尾を飾る幻想的預言の書「ヨハネ黙示録」に淵源する。

「黙示録」の著者、パトモスの聖ヨハネによれば、この世界の終末、すなわち、ハルマゲドン（世界最終戦争）と最後の審判の前に、一〇〇〇年間、信徒達がキリストとともにこの世界を統治する。「彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに一〇〇〇年の間、統治する。」（参考文献①、206）

そして、パトモスの聖ヨハネのこの黙示は古代・中世・近世を通し、今日に至るまでも西洋のキリスト教徒の想像力を喚起し、その精神を魅惑してきた。

聖ヨハネの預言はその聴衆の一人であったと言われるキリスト教最初の教父エイレナイオスによって増幅され、次のような夢幻的豊饒のイメージを結んだ。

「一本のぶどうの樹」それぞれに一万の若枝がのび、その若枝のひとつひとつに一万の小枝がのび、その小枝のひとつひとつに一万の房がつき、その房のひとつひとつに一万のぶどうの実がなるようなぶどうの実から二五メートルペースの酒が採れる時代がやってくる。聖徒たちの誰かがそのひと房をもぎ取ろうとすれば、他のひと房がこう叫ぶだろう。『私のほうが美味であるから、私をもいでください。私を食べ、主に感謝しなさい。』(参考文献②、三三ページ)

我々はUNDPのミレニアム開発目標をこうした西洋キリスト教の千年王国(ないしは至福千年)観念の豊饒のイメージを下敷きにして読み解かねばならない。UNDPのプランナー達は、二〇〇一年から始まった新たな千年紀(ミレニアム)を至福の一〇〇〇年(ミレニアム)として構想したのである。

事実、二一世紀最初の数年はBRICsと呼ばれる国々で爆発的な経済成長が始まり、その波及効果によって、独立以来数十

年、経済的に停滞していたサハラ以南のアフリカ諸国や太平洋島嶼国家においても年率5%をこえる成長が見られるようになったのである。そうしたユーフォリア(多幸症)的数年の中、UNDPの貧困撲滅をはじめとするミレニアム開発目標の達成に向かって世界は進んでいるものと考えられてきた。

それがなぜ、二〇〇七年UNDPの『人間開発報告書』は突然、危機を叫び始めたのであろうか。

UNDPの長調から短調への転調とも呼ぶべきこの転換の引き金を弾いたのは、二〇〇七年のノーベル平和賞を受賞したIPCC(気候変動に関する政府間パネル)の第四次報告書であった。

「その結論は、コンセンサスが得られやすい、かなり抑制されたもの」(参考文献③、三八ページ)であったにもかかわらず、IPCCの第四次報告書は全世界に衝撃波を放ったのである。

東京大学生産技術研究所教授、山本良一氏のIPCC報告書の要約によれば、その基本的論点は以下の通りである。

「気候システムに温暖化が起きていると断定するとともに、人為起源の温室効果ガス(二酸化炭素、メタンガスなど)の増加が温暖化の原因とほぼ断定。／二〇世紀後半の北半球の平均気温は、過去二三〇〇年間のうちで最も高温。(以下略)／過去一〇〇年間に、世界平均気温が長期的に

〇・七〇℃(一九〇六―二〇〇五年)上昇。最近五〇年間の温度上昇速度は過去一〇〇年のほぼ二倍。すなわち温暖化は加速している。／化石エネルギー(石炭、石油など)を重視しつつ、高い経済成長を実現する社会では、(二一世紀末の気温上昇は)約四℃(二・四―六・四℃)と予測」(参考文献③、三九ページ)。

そして、地球温暖化のポイント・オブ・ノーリターン(臨界点)のメルクマールとされるのが、産業革命前に比べ二度上昇した時だとされる(参考文献③、五七ページ)。すなわち、それ以後、地球温暖化が不可逆的に進行し、いかなる手段を講じても止まらなくなるのである。

山本良一氏によれば、「二〇一六年になると二℃突破の確率が50%を超える事態となると予測されている」。「二〇〇七年時点で私たちに残されている時間はあと一〇年もない」(参考文献③、五七ページ)。

我々はUNDPの二〇〇七年『人間開発報告書』において、やはり「危機を回避するために世界に与えられた時間は一〇年もない」と告げられていたことを想起しよう。それでは地球が温暖化すると、地球生命系(そして、その中で生息している人類)にとって何が不都合となるのだろうか。

UNDP報告書によれば「未来の地球の気候は劇的に変わろうとして」おり、「こうした現象は予測不可能で、地球環境の破局への扉を開き、やがて人類の居住不可能



発展途上国から見た地球環境問題

な土地が広がり、国々の経済的繁栄の土台を揺るがしかねない」からである。

「すべての国家と民族がたった一つしかない地球の同じ大気を共有している」(参考文献④、四ページ)が、「かつてマハトマ・ガンジーは、インドがイギリスのような産業化を成し遂げるために地球があつくつ必要なのかと言ったことがある」(同、五ページ)という。その答えは「世界のすべての人類が一部の先進国の人々と同じペースで温室効果ガスを吐き出すとすれば、地球が九つ必要になる」(同、五ページ)というものである。

「持続可能な発展」(sustainable development)という言葉があるが、六五億人をこえる人類が先進国並みの生活水準を享受するというシナリオは端的に持続不可能(unustainable)なのである。

山本良一氏によれば一人当たりのエコロジカル・フットプリント(一人の人間の年間の生活を支える平均された生態系の面積)は「世界平均では二・二ヘクタール／人であり、この指標上では世界全体をみると、すでに持続可能な状態を超えている」(参考文献③、七七ページ)という。「人類の活動が地球生物学的収容力をオーバーしているのは間違いない」(同、七七ページ)「エコロジカル・フットプリント」の概念は参考文献⑤に遡るが、一般には参考文献⑥によって普及した。

UNDP報告書も、山本説に共鳴するか

のように、「二一世紀の炭素の予算(危険な気候変動を起こさないで排出することができる炭素の収支)は、早ければ二〇三二年に底をつく可能性がある」(参考文献④、一〇ページ)と言いつつ、「私たちは持続可能な量の負債を積み上げており、未来の世代にとって危険な気候変動を避けがたいものにしつつある」(同、一〇ページ)と警鐘を鳴らす。

●無限世界仮説の破綻と有限世界仮説の復活

UNDP報告書と山本良一氏(そしてIPCC)の危機感を通底する主題は「人類が生存しているこの地球生態系は有限なものであり、人類の技術文明、経済活動は地球環境の有限性を突破しつつある」という公理命題である。

広大な宇宙空間の中で地球の生命は大気圏という地球表面を覆う薄い皮膜に包まれて生きている。それは地上に生きている人間から見れば限りなく高い天井のように見えるが広大な宇宙空間から見れば本当に薄い皮膜にすぎない。

この有限性の認識がUNDP報告書の危機感を理解し共有するための前提である。

近代文明はそれまでの世界観に革命的転換をもたらしたが、その柱の一つが無制限性の導入であった。コペルニクス・ブルーノ・ケプラー・デカルトらの科学革命によって、宇宙は無限の広がりを持つに至った。中世

人の心性を有していたパスカルは「この無限の宇宙という概念が私を怖れさせるのだ」と告白している。

この無限性の仮説が近代文明がその軌道走る公理となってきた。

産業革命とそれが産み出した資本主義経済も、この無限性の仮説を前提としている。産業革命の最大の発明は化石燃料(まずは石炭、そして後には石油)からエネルギーを解放することを可能にしたことである。

ジェイムズ・ワットの名に結びつけられるこの革新は、「火」の使用に匹敵する人類史の新たな段階を出現させたのである。それは、人類の活動を人力や動物の力の軛から解放放つて、巨大な生産力を産み出した。そして、化石燃料のエネルギーを手にした西洋人は「無限の進歩」という多幸症的境界観を抱くに至った。

「商業や雇傭は多かれ少なかれその量を固定され、国家によって指導・統制されるものだ」という観念(有限性仮説)が、自由な発展し行く経済においては進歩は何ものにも制約されないという思想(無限性仮説)に遂に屈服するにいたったのは、ほかならぬこの書物(アダム・スミスの『国富論』)の影響によるものであった(参考文献⑦、三二ページ)。

ワットとスミスとともにスコットランドの「エディンバラ協会」の会員であり、彼らに共通する思想は「自然には内在する力があり、地球も動植物も人類も進歩発展し

てきたもので、その内在する力をできる限り開発して人類の幸福に役立てようとする思想であった」(参考文献⑧、二七三～二七四ページ)。

開発と進歩の思想はここ、一八世紀後半のスコットランドに淵源するのである。

そうした「開発と進歩」の思想は一九世紀、二〇世紀を通して、世界(少なくとも資本主義化した西洋近代世界)を支配してきたが、それに疑問符を投げかけたのは一九六〇年代から七〇年代前半に現れた資本主義的「開発と進歩」の思想への懐疑であった。当時、バックミンスター・フラーによって「宇宙船地球号」という有限世界観にたつ概念が出現し、また、一九六八年に結成されたローマ・クラブは一九七二年に『成長の限界』という報告書を出して、「開発と進歩」の思想に対するアンチ・テーゼを提出した。

が、マーガレット・サッチャーが一九七七年、イギリス首相となり、ロナルド・レーガンが一九八一年、アメリカ大統領となつて、新自由主義経済学に則つて、アダム・スミスのレッセ・フェールの経済政策を採用すると「宇宙船地球号」や「成長の限界」が提示した「開発と進歩」への懐疑はかき消され、さらに一九九〇年代、アメリカ大統領となったビル・クリントンは「グローバリゼーション」を唱え、資本主義経済をそれまでの西洋資本主義圏から、開発途上国へとアウトソースし始める。その中から、

BRICsと呼ばれる新興工業国家群が台頭し、二一世紀の最初の数年は、世界経済の成長率が5%を超えるという空前の好況を迎えるのである。

そうした「開発と成長」をドグマとする世界資本主義の独走に、再び、決定的な形で制しをかけたのが二〇〇七年二月のIPCCの第四次報告書であった。

それは再び、地球生命系の有限性を訴え、人類の技術文明と資本主義経済が、その有限性を突き破ろうとしていることに警告を発したのである。

●地球温暖化の兆候としての海面 上昇と島々の沈下

地球温暖化の最も見易い現れは、海面上昇である。極地圏が温度上昇をすれば、南極大陸やグリーンランドの氷床が融けて、その水が海に流れ込む(二〇〇八年一〇月一七日のロイターの報道によれば、昨夏、北極圏の気温は通常の水準を五度も上回ったという)。

海水温の上昇により、海水が膨張する。その結果、海面が上昇する。太平洋の島々、とりわけ、海抜数メートル以下の環礁島はその影響をモロにかぶることになる。女優の藤原紀香さんがリポートして、日本中にショックを与えた、太平洋の環礁国ツバルの水没の危機は「その一例」である。

「二例である」と言ったのは、太平洋の島々のいたる所に、そうした海面上昇によ

る海岸線の後退、潮位上昇や高潮による塩害と、その結果としての集落や畑の放棄という事態が進行しているからだ。

私がモニターしているパプアニューギニアの新聞を読むだけでも、海面上昇が人間の生息に厳しい試練を課していることがわかる。

二〇〇八年九月一〇月の二カ月の記事を読むだけでも、パプアニューギニアにおける海面上昇による環境危機が急速に進行していることが、ひしひしと伝わってくる。

九月一六日の『ザ・ナショナル』紙によれば、ソロモン諸島の最北部に位置するカーテレット環礁の島民が、八〇キロ離れたブーゲンヴィル島(山本五十六元帥搭乗機が撃墜された太平洋戦争の激戦地)に移住を開始するため、カトリック教会が、八一ヘクタールの土地を確保したという報をつたえている。カーテレット諸島は二〇年前から海面上昇と戦ってきたが、一〇年以内に水面下に沈んでしまおうと言われる。海面上昇による、世界で初めての移住である。移住は二〇〇九年から始まり二〇二〇年に完了する予定である。

海面上昇は環礁島を沈めてしまえばかりではない。

パプアニューギニアの海岸の村々は、海岸線の後退による居住地や畑地の喪失に直面している。

首都ポートモレスビー近郊の村、ポレバダは一九六〇～七〇年代に墓地だった土地



発展途上国から見た地球環境問題

が今では海中に没した。村人によれば、「一九七〇年代初めの頃は、この墓地は海岸線から二〇メートル以上、内陸にあった。だが、今は、ご覧のように海岸線は墓地をこえてしまった」。

またパプアニューギニア北岸、マダン州シアル地区も海岸線を急速に失いつつある。「異常な力を持った巨大な波が我々のビーチを守っていた石壁と防風林だったヤシの樹を浸食している」と地元住民は『ザ・ナショナル』紙のフランシス・ガブリエル記者に語っている。

また、パプアニューギニア南岸、パプア湾に面したガルフ州の海岸の村々も高潮による塩害で家と畑を捨てて、内陸へと移動を始めている。

言っておくが、パプアニューギニアは総面積四五万平方キロメートル、北岸と南岸は五〇〇キロ以上離れている。

こうした広範囲にわたる海進を統一して説明し得る唯一の仮説は地球温暖化による海面上昇のみである。

しかるに、大阪学院大学の小林泉教授の『国際開発ジャーナル』二〇〇八年八月号におけるエッセーでは、ツバルが沈みつつあるのは、住居や行政関連施設などで「重量オーバーだから」（同誌、三七ページ）だそうである。荒唐無稽の説である。

二〇〇七年のIPCC第四次報告書発行とIPCCのノーベル平和賞受賞後、地球温暖化とその原因をめぐっては、侃々諤々

の論争がくり広げられ、トンデモ本、トンデモ論文の類も量産されている。

だが、我々人類には荒唐無稽のトンデモ本や、トンデモ論文をもてあそぶ余裕はない。

先日、日本を訪れたイギリスのチャールズ皇太子は講演で、「地球は生き残りをかけた戦いに直面している。金融危機が最大の関心になるのは当然でも、気候変動問題から目をそらすことは危険だ。気候変動の影響は取り返しがつかない」と訴えたという（『産経新聞』二〇〇八年一〇月二八日）。私は藤原紀香さんやチャールズ皇太子を支持せざるを得ない。

地球温暖化との闘いにおいて、我々人類に残された時間は短く、しかもそれは一刻一刻と失われつつあるのである。

（しおた みつき／アジア経済研究所
新領域研究センター）

《参考文献》

- ①『ヨハネ黙示録』（フランシスコ会聖書研究所訳）（サンパウロ）一九七九年。
- ②ドリユモ、ジャン（小野潮・杉崎泰一郎訳）『千年の幸福』新評論、二〇〇六年。
- ③山本良一『温暖化地獄―脱出のシナリオ』ダイヤモンド社、二〇〇七年。
- ④国連開発計画（秋月弘子・二宮正人監修）『人間開発報告書二〇〇七／二〇〇八』気候変動との戦い―分断された世界で試される人類の団結』国連開発計画、

二〇〇七年。

⑤Wackernagel, M. et al. "Ecological Footprint of Nations: How Much Nature Do They Use? How Much Nature Do They Have?" (www.pnas.org/cgi/doi/10.1073/pnas.142033699)

⑥メドウス、メドウス&ランダース（枝廣淳子訳）『成長の限界―人類の選択』ダイヤモンド社、二〇〇五年。

⑦アシュトン、T・S（中川敬一郎訳）『産業革命』岩波書店、一九七三年。

⑧坂本賢三『科学思想史』岩波書店、一九八四年。

⑨ブラウン、レスター（北城恪太郎監訳）『プランB2・0―エコ・エコノミーをめざして』ワールドウォッチジャパン、二〇〇六年。

⑩柴田明夫『水戦争―水資源争奪の最終戦争が始まった』角川SSコミュニケーションズ、二〇〇七年。